

明治大学の古代エジプト関連蔵書について

高宮 いづみ*

紀元前3千年頃に始まる古代エジプト文明について研究する分野は、欧米では「エジプト学(英: Egyptology)」の名称で呼ばれ、19世紀初頭以来、古代史研究の伝統的な一分野としての地位を確立している。世界最古の文明の一つとして、近年日本でも古代エジプトについて一般的な関心は高まってきているが、それに比してまだ学術分野としての認知度は幾分低いかも知れない。しかし明治大学は、日本における古代オリент史研究の草分け的研究者であった杉勇先生がかつて教鞭を執っていらっしゃったこともあり、学術分野としてのエジプト学に早くから取り組んで来た大学であった。そして明治大学の図書館には、このエジプト学関連の欧文献が豊富に所蔵されている。特に19世紀から20世紀前半に出版された書籍を含む欧文献の多くは、エジプト学の研究史を知る上でも貴重な資料である。ここでは、エジプト学の研究史に照らし合わせて、明治大学が所蔵するエジプト学関連の書籍についていくつか紹介してみたい。

近代的な古代エジプト研究、すなわち「エジプト学」の幕開けは、通常18世紀末から行われたフランスのナポレオン・ボナパルトによるエジプト遠征にその契機が求められる。マケドニアの大王アレキサンダーを意識していたナポレオンは、エジプトへの軍事遠征に学者と芸術家の一団を同行させていた。総勢150人を越えたという学者の一団には、動物、植物、鉱物、天文等を扱う自然科学者、歴史、考古、政治、経済等を扱う人文科学者たちの他に、画家や詩人も含まれており、エジプトにおいて様々な資

*たかみや・いづみ／文学部兼任講師／エジプト学、考古学

料と記録を収集してヨーロッパに持ち帰った。

ナポレオンの遠征隊は軍事的にはイギリスに敗れて、遠征隊が地中海沿岸の町で発見した有名な「ロゼッタ・ストーン」も戦利品としてイギリスに没収され、今日まで大英博物館に収蔵・展示されることになった。しかし、遠征隊がエジプトで収集した調査記録の多くはフランスが死守し、その一部は1809年から約20年かけてフランス人の手によって、“*Description de l'Égypte*” (日本語ではしばしば『エジプト誌』もしくは『エジプト紀要』と訳される)と題された全23巻の書物の中で公開された。

この『エジプト誌』は、縦が100cmを越す大判の書籍で、初版と第2版をを合わせても2百数十冊程度しか刊行されなかったという。美しい挿し絵が豊富に入っており、世界的にも名高い稀覯本である。『エジプト誌』の内容は、古代篇、現代篇、博物篇、地図篇に別れる。最も多数の巻が費された古代篇では、挿し絵を交えてエジプト各地の古代遺跡の様子が紹介されている。南から、フィラエ島、エレファンティネ島、コム・オンボ、エドフ、エル・カブ、エスナ、テーベ、デンデラ、メンフィス、アレキサンドリア等のエジプトの主だった遺跡が全て取りあげられており、新王国時代(紀元前1550～1050年頃)の都であったテーベについては、王たちの葬祭殿、貴族の墓地、「王家の谷」の王墓、アメン神を奉ったカルナック大神殿とルクソール神殿等に分けて、多数の遺跡が扱われている。

『エジプト誌』の大きな特徴は、豊富な美しい挿し絵にある。当時の挿し絵は銅版画で、しばしば彩色も施されていた。遠征隊に参加した画家たちが描いた絵を元にして、最高の技量を持つ銅版画家たちが美しい図を描き出したのである。その精緻な表現は、コピーでは詳細を復元できないほどである。特に遠征隊に同行して、デルタから上エジプトまでをめぐって絵を描き集めた画家D.V. ドノン(Denon)の活躍はめざましく、ドノンが描いたおよそ150の図版が『エジプト誌』の中に含まれている。ドノンは、当時エジプト各地に残っていた古代遺跡の壮麗な姿を、巧みな絵画の中に表していた。ドノンが描いた遺跡の中には、その後破壊されてしまったものも多数含まれており、今日も往時をしのばせる貴重な図像資料となっている。

ナポレオンの『エジプト誌』とそこに掲載された銅版画がヨーロッパ社会に与えた衝撃は非常に大きかった。まだ写真術がなかった19世紀前半のヨーロッパにおいて、この出版物と挿し絵は、古代エジプト文明の荘厳な姿をビジュアルに伝える役割を果たした。これらの挿し絵によって、ヨーロッパの人々が、偉大な古代オリエント文明の存在を実感し、古代文明に対しての熱狂をかき立てられたのである。このように、美しいだけではなく研究史的に大きな意義を有する『エジプト誌』は、明治大学図書館の収蔵図書の中でも一見の価値がある。

その後1822年に、フランス人のジャン・フランソワ・シャンポリオンが、ナポレオンの遠征隊がエジプトの地中海に面した町ラシードで発見した「ロゼッタ・ストーン」を手がかりにして、古代エジプトの文字ヒエログリフの解読に成功した。この解読のおかげで今日のエジプト学者は、古代の人々が直接書き残した史料に基づいて当時の歴史を考えることができるようになったのである。これが、真のエジプト学の幕開けと言えるであろう。

ナポレオンのエジプト遠征とヒエログリフの解読にはじまり、次第に熟成の度合いを深めていったヨーロッパにおけるエジプト学の進展過程の中で、もう一つの重要な出来事と考えられているのが、「エジプト考古学の父」と称されるイギリス人考古学者フリンダース・ペトリ（W.M. Flinders Petrie）の活躍である。1853年イギリスのチャルトンに生まれたペトリは、幼い頃にピラミッドに興味を持ち、1880年のピラミッド調査以降、エジプト各地で発掘調査を行うようになった。ペトリは1892年以降、イギリス最初のエジプト学者の教授職であるロンドン大学ユニバーシティ・カレッジの教授に就任した。日本人としては先駆の考古学者である濱田耕作がペトリに傾倒し、彼の業績をいくつか日本語の著作の中で紹介しているため、日本人考古学者の間でもペトリの知名度は高いのではないだろうか。

ペトリはエジプト各地で本格的な考古学的発掘調査を行い、古代エジプトの歴史を考古学的資料から解明する方法を確立したことで高く評価されている。それまでのエジプトにおける発掘調査といえば、しばしば欧米の博物館や個人コレクションの収蔵品を得ることが主な目的の一つであっ

たため、美術品としての価値が高いものだけに焦点が当てられ、土器やその他の生活用具のような見栄えのしない遺物は記録もされないままに放置されることが多かった。しかしペトリーは、地味な遺跡や遺物にも目を向けて、層位的な発掘調査（遺跡を層位別に分けて発掘する）や、出土遺物の型式学的分類と編年を行って、まさに考古学から古代エジプト史を解明する今日的な方法を実践し、かつ確立したのであった。

ペトリーが発掘調査を手がけた遺跡の数は多く、エジプト北部のナイル・デルタでは、タニス、ナウクラティス、デシャシェ、ナイル河上流のエジプト中・南部では、ギザ、メンフィス、ハワラ、カフーン、イフナースヤ、アマルナ、アビュドス、デンデラ、コプトス、テーベなどがそのうちに含まれる。ペトリーのエジプト調査の多くは、当時の著名な女流作家アメリカ・エドワーズ等が1882年に設立した「エジプト探検基金 (The Egypt Exploration Fund、1919年から The Egypt Exploration Society)」によって後援され、報告書もこの基金から出版されたものが多い。

明治大学図書館には、この基金から出版された出版物を中心として、ペトリーの著作のうち重要なものを20点あまり所蔵している。例えば、ペトリーはエジプト南部にあるアビュドス遺跡の発掘調査を行い、紀元前3000年頃に年代付けられるエジプト第1王朝の王墓地を検出して、始めてエジプト最古の王たちの墓を特定するという研究史的に極めて重要な成果をおさめた。この調査と研究によって、それまでは王名表などの後世の記述からしか知られていなかった王たちの実在が確認されたのである。さらに、近辺から同時代の遺構を多数検出し、古代エジプトの初期の歴史解明に大きな躍進をもたらした。その調査結果は、*The Royal Tombs of the First Dynasty* (1900年)、*The Royal Tombs of the Earliest Dynasties* (1901年)、*Abydos, Part I* (1902年)等に報告されている。今日エジプト学者たちが、エジプトの古代王朝の起源について、同時代史料に基づき比較的詳細に語ることができるのは、ペトリーのおかげと言っても良いであろう。

また、ペトリーは統一王朝出現直前の先史時代末期（紀元前4000～3000年頃）の遺跡を体系的に発掘調査し、この時期の考古学的編年を確立したことで著名である。上記基金からの出版ではないが、ペトリーが考案したS.D.法と呼ばれる編年を含めて、先史時代末期の歴史と遺物をまとめ

て記述した *Prehistoric Egypt* (1920 年) と *Corpus of Prehistoric Pottery and Palettes* (1921 年) は、今日でもエジプトの先史時代研究者にとっては必見の書である。

ペトリーは 1942 年に没したが、多数のエジプト学者がペトリーに啓発され、その考古学的遺跡調査方法を踏襲して詳細な調査を行うようになった。ペトリー自身や後進たちによって 20 世紀前半に刊行された報告書は、すでに刊行から 100 年近く経っているものもあるが、未だに貴重な研究資料として活用されている。

20 世紀のエジプトにおける一般にも良く知られた最大の発見は、ツタンカーメン王墓の発見であろう。エジプト南部のテーベ(現在のルクソール)西岸にある「王家の谷」と呼ばれる岩山中の谷で、1922 年、イギリス貴族のカーナボン卿から後援を受けた考古学者ハワード・カーターが、新王国時代(紀元前 1300 年頃)の王ツタンカーメンの遺体を納めたほぼ未盗掘の墓を発見したのであった。これが、これまで知られる限り唯一の新王国時代の未盗掘王墓である。

「王家の谷」の入り口近くに穿たれた墓への入り口から階段を下って入ると、2つの封鎖壁の向こう側に、前室、付属室、玄室、宝庫の4つの部屋から成る墓が現れた。玄室には黄金のマスクを付けた王のミイラが、入れ子になった3つの人形棺、1つの石棺、4つの厨子に囲まれて眠っていた。入り口通路を除くと 15 メートル四方足らずのスペースに収まってしまふこの墓は、王のものとしては小さすぎて元は別の人物のために造営されたと考えられたが、前室から番号が付けられただけでも 600~700 個、宝庫からは 300 個、付属室からは 2000 個あまりという、膨大な数の副葬品が出土した。その中には、戦車や武器、ベッドや椅子等の家具、装身具、神像あるいは食糧など、多様な品々が含まれており、豊富に用いられた黄金と貴石、黄金のマスクをはじめとする出土品の造形の美しさによって、当時の人々を驚愕させることになった。

この大発見について、カーター自身がいくつか報告を発表している(例えば明治大学所蔵 H. Carter & A.C. Mace, *The tomb of Tutankhamen: discovered by the late Earl of Carnarvon and Howard Carter, 1927-1933*) が、莫大な量にのぼる出土品についての詳細な報告書はカーターの生前には完成し

なかった。1960年代以降、カーターのノートと発掘調査時の写真を保管している英国オクスフォード大学のグリフィス研究所 (Griffith Institute) が中心となって、各分野の専門家の協力を仰ぎ、出土品の詳細な報告を出版し始めた。『ツタンカーメン王墓シリーズ (Tutankhamun's Tomb Series)』と題された一連の報告書のうち、これまでに「ヒエラティック銘文 (第2巻、J. Cerny, *Hieratic inscriptions from the tomb of Tutankhamun*, 1965)」、「複合弓 (第3巻、W. McLeod, *Composite bows from the tomb of Tutankhamun*, 1970)」、「丸木弓 (第4巻、W. McLeod, *Self bows and other archery tackle from the tomb of Tutankhamun*, 1982)」、「遺体 (F.F. Leek, *The human remains from the tomb of Tutankhamun*, 1972)」、「楽器 (第6巻、L. Maniche, *Musical instruments from the tomb of Tutankhamun*, 1976)」、「ゲーム盤 (第7巻、W.J. Tait, *Game-boxes and accessories from the tomb of Tutankhamun*, 1982)」、「戦車 (第8巻、M.A. Littauer & J.H. Crouwel, *Chariots and related equipment from the tomb of Tutankhamun*, 1985)」、「模型舟 (第9巻、D. Jones, *Model boats from the tomb of Tutankhamun*, 1990)」等がすでに出版され、明治大学図書館にも所蔵されている。これらはまだ出土品の一部に過ぎないが、当時のエジプト王たちの栄華を実感するには十分な内容と思われる。

上記に紹介したほかにも、事典や歴史書等、基本的なエジプト学関連の書籍が多数蔵書に含まれており、エジプト学を志す研究者と学生には有益な情報を提供するであろう。